

その他

『ボストン研修2019』 研修記

今西好海¹⁾ 相模菜絵¹⁾ 高倉伸有²⁾
 矢 寫 裕 義²⁾ 高山美歩²⁾ 高梨知揚²⁾

2019年9月4日～11日に本学鍼灸学科から30名（学部生24名，大学院生3名，研究生1名，研修生1名，卒業生1名），日本鍼灸理療専門学校生から9名の総勢39名でアメリカ・マサチューセッツ州ボストンでの鍼灸学科主催の海外研修に参加しました。マサチューセッツ州はアメリカの東海岸にあり，北海道よりやや北に位置する州で，東京の約10倍の面積があります。ボストンはこの州都で，人口はおよそ60万人です。

研修はおよそ1週間という短い期間でしたが，日本ではみられない風景や普段の大学生活では感じられない雰囲気を体験することができ，私たちにとって今後の学習に取り組むとても良い動機付けになりました。

1日目：9月4日(水)

成田空港第2ターミナル出発ロビーに午後4時集合でしたが，多くの人たちは早めに到着し，ターミナル内で食事をするなどして楽しんでいました。集合時間に全員がきちんと集まり，添乗員さんとの顔合わせや研修の簡単なスケジュールや注意点などの説明を受け，見送りに来てくださった櫻井理事長先生からお言葉をいただき，最初の集合写真を撮りました（写真1）。その後，午後6時5分発のJL008便に乗り，日本を後にしました。

日本の航空会社ということもあり，2回の機内食はいずれも日本食でした。機内ではゲームに興じたり映画を楽しんだり，皆，様々なことをして過ごしました。直行便とはいえ，私たち初参加の者にとっては13時間のフライトは長く感じましたが，この研修への参加が2回目だった大学院生の先輩方は，前回の乗り継ぎ便に比べ，今回の直行便はとても楽だったと言っていました。しかし私たちは，疲れ果てた体でボストンの地に降り立ちました（写真2）。アメリカへの入国審査では，入国管理局の人たちが思っていたよりも優しくほとんどの学生が問題なく通過しましたが，なぜか1人だけ別室へ連れて行かれてしまいました。その間，先生方が心配して少し緊張した空気が漂ったのですが，すぐにその学生も解放されたので，先生方の強ばった表情も一気に緩んでいたのが印象的でした。

荷物を受け取り到着ロビーに出ると，ボストンはゲリラ豪雨に見舞われていました。そのせいで私たちが乗る予定のバスは渋滞に巻き込まれてなかなか到着せず，1時間ほど空港内で待ちました。バスの中では現地の日本人ガイドさんの話を聞きながらボストンの街並みを眺めていましたが，車窓からの景色は日本で見てきたものとは大きく違い，とても新鮮な印象を受けました。

空港から30分ほどバスに揺られ，夜7時過ぎに宿泊先であるThe Westin Copley Place, Bostonに到着し，チェックインを済ませ，地上8階から36階までに割り当てられた各自の部屋に向かいました。私たちの部屋は運良く34階で，その高さから見るボストンの夜景はとても美しく，言葉を失うほどでした。このホテルからの夜景は日本では見たことのないような輝きがあり，改めて日本を離れボストンに来たのだなと実感しながら，その素晴らしい夜景に包まれて眠りにつきました（写真3）。

2日目：9月5日(木)

午前中はMCPHS大学（Massachusetts College of Pharmacy and Health Sciences：マサチューセッツ薬科健康科学大学）のキャンパスを訪問し，午後はTed Kaptchuk先生の講義を受けました。

ホテルのロビーに集合したのは8時30分でしたが，この日は多くの学生が時差のため朝早くに目覚めていたようで，集合時間までの間，散歩に出かけたりホテル内のジムでトレーニングをしたりして過ごしていました。

朝食を済ませた後，最初の目的地であるMCPHS大学まではグリーンラインという地下鉄で向かいましたが（写真4），ホテルからMCPHS大学までの区間は地上を走っていて，東京だと丸の内線のような感じでした。ボストンの地下鉄は日

1) 東京有明医療大学保健医療学部鍼灸学科4年

2) 東京有明医療大学保健医療学部鍼灸学科 E-mail address : takakura@tau.ac.jp

本とは違い、突然止まったり動きだしたりしてとても揺れが激しく、手すりに掴まらずに立っていることはできませんでした。

MCPHS大学のキャンパスは、Longwood Medical Areaという駅から歩いて数分のところにありました。事前の説明で、薬学分野ではアメリカで2番目に古い大学だと聞いていたので、古い建物を想像して行きましたが、外観は新しくとても明るく、私たちが想像していた建物とは全く異なっていました(写真5)。まず正門から入校した私たちは、Center for International studiesの職員O'Brienさんの案内で、暖炉のある歴史がありそうな大きな教室に移動しました。そこでは、International Academic Servicesのディレクター Sanford先生やO'Brienさんたちが、MCPHS大学の歴史や学校について詳細な説明をしてくださいました。MCPHS大学は、薬学系の大学でありながら、アメリカで最も古い鍼灸の大学院大学であるNew England School of Acupuncture (NESA)を2016年に吸収合併し、それを機に本学と研究や教育における協定を結んでいる大学です。全学生数は約7,000人で、その中に日本人数名と多くの外国からの留学生が含まれているということでした。もともとMCPHS大学は西洋医学に特化した学問だけを扱っていたそうですが、NESAが加わったことにより鍼灸学と薬草学に関するデパートメントが大学院に加わり、東洋医学を含めた幅広い分野を学ぶことが可能になったとの説明を受けました。

その後、MCPHS大学の学生さんたちによるキャンパスツアーがありました。ここでは、日本の大学とアメリカの大学の違いを2点見出すことができました。1つは、学生の自習方法です。日本の学生が紙とペンを使うのに対し、MCPHS大学の学生は、ほとんどがパソコンやタブレットを使用して学習していました。こうした日米の学生の自習方法の違いは、両国の文化の違いが背景にあるのかなと思いつつ、その違いを実感しました。もう1つは、MCPHS大学の図書館に、書籍や専門雑誌が置かれていないことでした。この大学では、ほとんどの書籍や専門雑誌が図書館に設置されているパソコンの中に電子書籍として保管されており、学生たちはそのパソコンを使用して本を読んでいるとのことでした。例外的に、古くて電子書籍化をすることができない書籍だけは、図書館に保管されているということでした。広くて十分にスペースがあるアメリカの大学でも、書籍の保管をするためのスペースを最小限にしているということを実感しました。

このキャンパスツアーで私たちが一番衝撃を受けたのは、新しく建てた校舎の中に古い校舎がそのまま残してあったことです(写真6)。新校舎を建てる時に旧校舎を残したいという多くの人々の要望を受け入れ、このような二重構造の形になったそうです。アメリカで2番目に古い薬科大学と聞いていたことから古い校舎を想像していた私は、外観の新しい校舎に驚き、その理由を聞いた時に更なる驚きを感じました。全ての古いものを壊し新しいものに作り替えてしまうのではなく、古いものを新しいもので覆う形で残すという、日本では見たことない独創的なアイデアを目の当たりにし、とても感銘を受けました。

学内ツアーの後は、バイキング形式での昼食を御馳走になりました。普段アメリカの人たちが食べているランチを味わうことができ、とても良い経験になりました。昼食を終え、MCPHS大学の生協で買い物などを済ませた後、ハーバード・メディカル・スクール(Harvard Medical School)に徒歩で向かいました(写真7)。青々とした芝生が一面を覆うハーバード・メディカル・スクール正門前の大きな広場では、青空の下でヨガをしている人、勉強をしている人、居眠りをしている人など、様々な人々それぞれが自由にその空間を楽しんでいました。その自由な雰囲気やリラックスしている人たちの姿を目にし、少しだけ羨ましく思いました。

その後、ハーバード・メディカル・スクールの教授で、本学鍼灸学科の客員教授であるTed Kaptchuk先生のオフィスに徒歩で向かい、Kaptchuk先生の講義を受けました(写真8)。Kaptchuk先生はプラセボ研究の世界的権威で、鍼灸の研究をはじめとする様々な内容の論文を、世界的に有名な医学雑誌などに数多く報告されています。

Kaptchuk先生の講義は、オフィスの入口で先生がにこやかに全員と握手をして迎えて下さったところから始まりました。オフィスにはお菓子とジュースを用意してくださっており、Kaptchuk先生は私たちにとてもフレンドリーに接してくださいました(写真9)。そして、世界のプラセボや鍼の研究に関する講義をしてくださりました。プラセボ効果とは、薬効のない「偽薬」を患者さんが本物の薬だと信じ込むことによって、患者さんにあたかも薬効があったかのような効果がみられる現象を指します。私たちは帰国後、Kaptchuk先生が送って下さった驚くべきプラセボ効果に関するドキュメンタリー動画を見ました。この動画は、腰椎椎体の圧迫骨折で手術が必要な患者さんに、本来であれば骨折部にセメントを注入するのですが、この患者さんに対してはセメントの注入を行わずに、その他の手順や方法は本物の手術と全く同様に行い、その後の経過を観察したというものでした。驚くべきことに、この患者さんの圧迫骨折の症状は骨折修復に必須のセメントを注入しなかったにもかかわらず、セメントを注入した手術とほぼ同じように改善したのです。効果があるはずがない偽治療(プラセボ治療)であっても本物治療のように症状を改善させるプラセボ効果は、人間が持つ未知の自然治癒力が引き出されることや、私たち人間が持つ計り知れない潜在能力のすごさを示しているのだと思います。

また講義では、Kaptchuk先生に「神明に通じる」という言葉を教えていただきました。これは、施術者が治療をするにあたって患者と良好な信頼関係を結ぶということが大切だ、という意味です。患者との信頼関係がより良いものであれば、それに呼応して治療効果も良いものになるとKaptchuk先生は仰っておられました。Kaptchuk先生が講義の前に全員と交わした握手は、私たちとの信頼関係を築くためのテクニックの1つであると教えてくださいました。

Kaptchuk先生の講義を終え、そこから電車でホテルに戻りました。そしてホテルから5分ほど歩いた場所にある有名なピザ屋さんで夕食をとりました。そこで出てきたクラムチャウダー、ハンバーガー、ポテト、デザートのココアケーキは、どれもとっても美味しかったです。それぞれの量がとても多く、そのすべてを完食した私たちはとても苦しい思いをしました(写真10)。

3日目：9月6日(金)

この日は、午前中にMGH/HST Martinos Center for Biomedical Imaging (以下「Martinos Center」)でJian Kong先生の講義を受け、午後はハーバード大学のキャンパスを見学するというスケジュールでした。

Martinos Centerは、ハーバード大学とマサチューセッツ工科大学(MIT: Massachusetts Institute of Technology)が共同で設立した、脳の研究に関しては世界一の研究施設です。Kong先生はこの施設で、神経活動によって変化するだろうと思われる脳血流を検出するfMRI(機能的磁気共鳴画像法)を用いて、鍼、痛み、プラセボについて世界の最先端を走る研究をしています。はじめに、Kong先生の助手の先生がMartinos Centerの設立の経緯や歴史、Kong先生の研究室で行ってきた研究について紹介してくださいました。その後Kong先生が、現在進行中の最新の研究について講義をしてくださいました(写真11)。この研究は、被験者に本物鍼と偽鍼を使用して治療を行った時と、その時のそれらの様子をビデオで撮影しておき、後日それぞれの患者に同じ治療をすると告げ、本人の治療中に撮っておいた映像を見せながら施術をするふりをした(実際には治療はしていない)時の痛み閾値の変化について比較した、というとても興味深い方法でした。この時、視覚のみの刺激に対する変化を観察するためにそれ以外の感覚は遮断して行ったそうです。そうすると、被験者の痛み閾値が最も高かったのが本物鍼を使用した治療を行った時、その次に高かったのが本物鍼を使用した動画を見せた時、その次が偽鍼を使用した治療を行った時、一番低かったのは偽鍼を使用した治療の動画を見せた時、という結果になったそうです。これらの結果から、実際には鍼を刺さずに治療の映像を見せているだけで痛みが改善する可能性があり、これに関連する研究は現在も進行中で来年にはその結果も出る、とKong先生は仰っていました。また、鍼治療の効果はカフェインにより抑制されると言われていた定説を覆し、カフェインは鍼の効果を全く抑制しないということを明らかにした研究についても、Kong先生に解説していただきました。

Kong先生の講義が終わった後には、質疑応答が活発に行われました。視覚刺激を対象とした今回のような研究を聴覚刺激に変えて行くとどのような結果になるのか、という学生の疑問に対してKong先生は、聴覚刺激については実験を行っていないが、おそらく同じような効果があると思うので、やってみる価値がある、と答えてくださいました。

質疑応答が終わった後、Martinos Centerの施設を見学しました。私たちの人数が多く、セキュリティの関係上、1階のみでしたが、世界一の脳研究所でfMRIを実際に使用して研究をしている現場を見学できたことはとても良い経験になりました。この見学終了後の、施設内にあるカフェテリアでのランチは、特にフルーツが美味しかったので、盛りだくさんのフルーツを食べました。

昼食後にアメリカ海軍のCharlestown Navy Yard(写真13)を見学した後、Massachusetts General Hospitalまで徒歩で移動し、エーテルドームを見学しました(写真14)。エーテルドームは、世界で初めてエーテル麻酔下で公開手術を行った場所です。現代の西洋医学では欠かせない麻酔医学の最初の一步が踏み出された場所に自分自身の足で立ち、その当時の雰囲気を実際に肌で感じる事ができて、とても感慨深かったです。

見学を終えて、レッドラインという地下鉄でハーバード大学に向かいました。最寄り駅であるハーバード駅の1つ手前の駅で、急に電車が不通になってしまい復旧に時間がかかるとのアナウンスが入ったため、そこからボストンの街並みを楽しみながらハーバード大学まで30分ほど歩きました。構内にあるハーバードさんの銅像の靴を触ると頭が良くなると聞いていたので、ハーバード大学に到着したらまずハーバードさんの靴を触ることを楽しみにしていましたが、不運なことにこの日に限って構内が公開されておらず、その願いは叶いませんでした。そのような迷信に縋るのではなく、自分の努力で頭を鍛えなさい、ということなのだポジティブに考えながら、Harvard大学隣のHarvard Coopでハーバード大学のグッズや本等、様々なお土産を買い、皆ショッピングを楽しんで再び地下鉄に乗りホテルに戻りました。

この日の夕食はホテルの近くのレストランに行き、ステーキを食べました。前日のハンバーガーの量の多さに苦しめられた記憶がまだ鮮明に残っていたためステーキと聞いたときは少し不安になりましたが、私たちでも無理せず食べ切ることができる量で安堵したのを鮮明に覚えています(写真15)。夕飯を終えホテルに帰った私たちは、時差ぼけに加

え、かなりの距離を歩いたこともあり疲労困憊状態で、気絶するように眠りにつきました。

振り返ってみると、この日は様々なハプニングがありとても疲れた1日でしたが、長時間の歩行で身体を、そして講義で頭を、それぞれ鍛えることができた、とても充実した1日でもありました。

4日目：9月7日(土)

午前中はThe University of Illinois at Chicagoの准教授であるJudith Schlaeger先生の講義を受け、午後はMIT博物館に行きました。

Schlaeger先生は、助産師として30年以上の臨床経験があり、問題になっていた女性外陰部痛に注目して、この疾患に対する鍼治療の効果について高倉先生の研究チームと共同研究をされています。本来であればシカゴからお越しただいて直接講義をしていただく予定でしたが、体調を崩されて、お医者様からも飛行機での移動は症状を悪化させるとのことで、急遽スカイプで講義をしていただくことになりました。

Schlaeger先生は、アメリカにおけるオピオイド依存症問題についての講義をしてくださいました。オピオイドとは、アメリカで重大な社会問題になっている薬で、その依存症による過剰摂取のため毎日およそ130人もの人々が亡くなっているそうです。1990年頃、製薬会社はオピオイドが依存症を引き起こす薬物であるということを知りながら、それを伏せて医療関係者に鎮痛剤として処方するように働きかけた結果、これが合法的に多くの患者に処方されるようになったそうです。こうした動きがアメリカの至るところで起こり、痛みを有する多くの患者が知らぬ間にオピオイド依存症になってしまったそうです。そして医者がオピオイドを誤用していることに気づき、処方を中止するようになりましたが時すでに遅く、多くの患者は痛みによる苦しみや薬への依存に抗することができず、違法と分かっているにもかかわらずそれを求めるようになってしまいました。アメリカでは2016～2017年にこの問題が最も深刻な状況にあったそうですが、現在はこうした依存症患者数が徐々に減少しているとのことでした。

一方で、現在は「ネオネイタルシンドローム」が問題になっているそうです。これは妊娠中の母親がオピオイド製剤を使用することにより母体内の胎児もこれに晒されてしまい、胎児が身体的、感情的、精神的問題を持った状態で生まれてしまう、という悲しい問題です。このような状態で生まれてきた赤ちゃんには、慢性のオピオイド依存症に対する治療と同様の治療が施されているそうです。

講義の後、Schlaeger先生は体調不良にもかかわらず学生からの多くの質問に丁寧に答えてくださり、会場からの退出時間ギリギリまで私たちにお付き合いしてくださいました。

Schlaeger先生とお別れした後は、ほとんどの人が次の集合までの空き時間を利用してホテルの近くにある洋服屋さんなどで買い物をし、楽しい時間を過ごしていました。そこは日本で買うよりはるかに安くブランド品を買うことができるお店で、私たちは金銭感覚を忘れて買い物を楽しみました。

午後はMIT博物館へ行きました(写真16)。不思議な動きをする様々な作品が展示してありました。作品はどれも一見簡単に制作できそうに見えましたが、よく観察するととても緻密に計算されて作られたもので、さすがMITの学生の作品だなと感心しつつも、あまりにも面白い動きをしていたため、しばらく呆然と眺めてしまいました。

博物館での見学を終えた後、野球が好きな人はフェンウェイ・パークに直行しメジャーリーグ観戦を楽しんでいたようでした(写真17)。

5日目：9月8日(日)

この日は日曜日ということもあり、研修期間内で最も集合時間が遅い朝だったので、ランニングをしたりゆっくりモーニングを楽しんだりショッピングをしたりと、自由な朝の時間を過ごしました。

10時にホテルのロビーに集合し、地下鉄を乗り継いで海の近くのクインシー・マーケットに行きました。クインシー・マーケットはレストランやお土産さんが並ぶ市場で、特にその中央にあるボストン名物のシーフードを扱うお店がずらりと立ち並ぶフードコートは、観光客はもとより地元の人たちにも大変人気がある観光スポットです。ほとんどの人がお昼ご飯にクラムチャウダー1人前を食べていましたが、中にはそれを1人で4つも食べている人もいました(写真18)。

午後はボストン美術館に行きました。この美術館はアメリカの三大美術館の一つで、アメリカの作品だけでなく世界中の作品が展示されています。その中には日本の作品だけを展示するエリアもあり、日本では見ることができない作品に時が経つのを忘れて見入ってしまいました(写真19)。

6日目：9月9日(月)

この日の集合時間は早く、朝7時にホテルのロビーに集合し、ボストンからおよそ70km西、ボストンに継ぐマサチューセッツ州第2の都市ウースターにあるNESAに、貸し切りのバスで向かいました。

NESAでは、Iuliano先生にYNSA (Yamamoto New Scalp Acupuncture) の講義をしていただきました(写真20, 21)。YNSAとは、宮崎在住の日本人医師、山元敏勝先生が提唱している山元式新頭鍼療法のことで、主に頭部に鍼をして治療をする方法のことです。Iuliano先生によれば、この方法で定める頭皮上のA～I点までの刺鍼部位9か所を、筋・骨格系の疾患をはじめ、脳神経疾患や耳鳴、眩暈、失語症などによる症状に対して上手く使い分けることで治療するということでした。講義の後は実技セッションとなり、はじめに助手のLaCoss先生が肩に痛みのある患者さんを対象にデモンストレーションを行いました。まず刺鍼前に患者さんの肩の可動域をチェックし、その後指で刺鍼部位のポイントを抑えながら肩の可動域をもう一度確かめ、変化があることを確認しました。そこで変化があれば、その部位にわずか15mmの鍼を頭部前方から後方に向けて刺鍼します(写真22)。デモンストレーションでは、肩痛の患者さんの肩関節可動域が頭皮への鍼刺激によって大きくなったのを目の当たりにし、この治療は頭部への刺激により全身のあらゆる部位の症状を緩和することができるもので、とても画期的なものだと感じました。そこから私たちも2人1組でペアを組み、NESAの先生方に指導をしていただきながらYNSAに挑戦しました。アメリカのディスプレイ鍼は日本で使用されているものとは異なり、1つのパッケージに複数の鍼と1本の鍼管が入っていました。デモをしてくださった助手の先生方が鍼管を使っていなかったため、この時の練習では私たちも鍼管を使わずに鍼を刺入しました。私たちは鍼管を使わずに鍼を刺入する練習をしたことがなかったので、うまく鍼を刺入することができるかなと心配しましたが、このほかスムーズに鍼を刺入することができました。初めてのチャレンジにもかかわらず、治療前と治療後で肩の可動域を劇的に変化させたグループもありました。

実技セッションが終わった後は、NESAの校舎をいったん出てキャンパスや学生寮の見学をしました。キャンパス内にある購買部では、私たちの興味を惹く様々なグッズが販売されていました。学生寮は1人暮らし用の部屋と2人以上で暮らす部屋が用意されていました。どの部屋にも広いキッチンなどがあり、自炊をする人にとってはとても親切な設備が整っていました。また寮の中には2階建ての部屋もありました。

見学後は校舎に戻り、昼食にピザをご馳走になりました。いろいろな種類のピザを用意してくださり、好みのピザが選び放題、食べ放題でした。中には初めて経験するトッピングもありましたが、どのピザもとても美味しかったので、お腹一杯いただきました(写真23)。デザートはチョコレートのケーキは、これぞ「ザ・アメリカ」ともいえるべき、とびきり甘いアメリカンスウィーツでした。食後に、NESAのHul副学長、Gormanエグゼクティブディレクターから、アメリカでは鍼灸がどれほど普及しているか、NESAでは鍼についてどのような教育をしているか、など興味深いお話をいただきました。最後に私たち全員にプレゼントを下さり、Hul先生やGorman先生と一緒に写真を撮って、NESAを後にしました(写真24)。

NESAでの研修後は、バスで1時間ほど移動したところにあるレンサムビレッジというアウトレットに行きました。いろいろなブランド品がとても安くっており、少ない時間でしたがみんな両手が一杯になるほど買い物を楽しんでいました。

ボストンで食べる最後の夕食は、地下の全フロアを貸切ったビュッフェ形式のものでした。このフロアは私たちだけの空間で周りを気にすることなく思いっきりリラックスして、先生方と1週間の思い出話をしながら和やかな雰囲気の中で美味しい夕食を楽しむことができました。この日の夜はホテルの34階から見える夜景に酔いながら、明日はいよいよ帰国かと、名残惜しい気持ちでいっぱいになったことを覚えています(写真25, 26)。

7日目：9月10日(火)

最終日は集合時間が比較的遅かったため、それまでの間は自由に過ごしました。バスで空港まで向かい、お土産などで重くなった荷物の重量オーバーを気にしながらチェックインカウンターで無事チェックインを済ませました。出発ロビーでは、ボストン最後のクラムチャウダーを食べ、搭乗時間ギリギリまでお土産店巡りをして楽しみました。

帰りのフライトは皆の席がばらばらの上、1週間の不慣れな海外生活の疲れがドッと出たせいか、行きにも増して成田空港到着までの時間がとても長く感じられました。

日本に到着し、入国手続きを済ませてベルトコンベアーから流れてくる自分のスーツケースを受け取りましたが、最後に1人だけスーツケースが戻ってこない、というハプニングが起こりました。後日、それはご本人の手元に無事に届いたとのことでした。

最後に到着ロビーにて全員で集合写真を撮り、すべての予定を終え無事解散しました（写真27）。

おわりに

私たちが第5回目のボストン研修に参加する機会をいただけたのは、歴代の先輩方がこの研修にふさわしい態度で講義に臨み、その気持ちを受け入れ先の先生方が感じ取ってくださったからだと思います。ボストン研修は、世界最先端で活躍されている研究者のお話を聴き、鍼灸の研究が海外でどれほど進んでいるかを知ることのできる絶好のチャンスです。本研修に参加して、TAU鍼灸学科のボストン研修が6回、7回と続くよう、将来ボストン研修に参加される皆さんには、この研修に携わっているすべての先生への感謝の気持ちと、この研修を後輩に引き継ぐのだという気持ちをもって臨んでほしいと強く思いました。私たちもこの思いや、研修での学びや感動をしっかりと後輩の皆さんに伝えていきたいと思えます。

今回のボストン研修では、本研修でしか受けることのできない講義をはじめ、様々な体験を通して多くのことを学びました。それと同時に、わずかな時間ではありましたがボストンの歴史的な名所、美術館、庶民の憩いの場などを散策することができ、アメリカの文化の一端を肌で感じることができました。私たちにとってはこれまでの人生で味わったことのない最も充実した1週間でした。このような機会を与えてくださった櫻井理事長をはじめ、引率してくださった先生方、講義をしてくださったKaptchuk先生、Kong先生、Schlaeger先生、Iuliano先生、Hul先生、Gorman先生、Sanford先生に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

【ボストン研修2019 研修目的】

ボストン研修は、本学の教育理念である「国際性に富む有為な人材を育成する」ため、(1) 世界の鍼研究を牽引する科学者（本学鍼灸学科客員教授でHarvard Medical SchoolのKaptchuk教授、Kong准教授とThe University of Illinois at ChicagoのSchlaeger准教授）の講義を体験し、(2) アメリカにおける鍼灸の教育機関や研究機関（New England School of Acupuncture, Martinos Center for Biomedical Imaging, Massachusetts General Hospital, Harvard Medical School, MCPHS大学）での研修や見学を通じて、グローバルな視点を持った鍼灸学士となるための意識を高め、(3) アメリカの生活・文化・自然・歴史などに触れ、人生観や世界観を広げることを目的として実施しました。

【ボストン研修2019 研修スケジュール】

9月4日（水）

16：00 成田国際空港 集合
 18：15 成田国際空港 発
 ・・・・＜日付変更線通過＞・・・
 18：05 Boston Logan International Airport 到着
 Westin Boston Waterfront 泊

9月5日（木）

午前 MCPHS大学（マサチューセッツ薬科健康科学大学）（ロングウッドエリア）にて研修
 ・MCPHS大学の紹介
 ・施設見学・Coop
 昼 MCPHS大学で歓迎ランチ
 午後 Ted Kaptchuk先生の講義（Harvard Medical Schoolのオフィスにて）
 夜 ハンバーガー・クラムチャウダーのディナー（レストランUNOにて）

9月6日（金）

午前 Jian Kong先生の講義（Martinos Center for Biomedical Imagingにて）
 昼 Martinos Center学食にてランチ
 午後 Boston Navy Yard 散策
 USSコンスティテューション号博物館 見学
 Massachusetts General Hospital・エーテルドーム 見学
 Paul S. Russell, MD Museum of Medical History & Innovation 見学
 Harvard Coop（Harvard Universityは見学できず）
 夜 ステーキディナー

9月7日（土）

午前 Judith Schlaeger先生の講義（オンライン講義）
 昼 各自ホテル周辺でランチ・買い物など
 午後 MIT博物館
 夕 メジャーリーグ観戦などフリータイム

9月8日（日）

午前 フリータイム
 昼 クインシー・マーケットにてランチ
 午後 Museum of Fine Arts, Boston（ボストン美術館）
 各自ボストン市内フィールドワーク

9月9日 (月)

午前 New England School of Acupuncture (NESA) (MCPHS大学ウースターエリア) にて研修

- Diane Iuliano先生の講義・実習
- NESA・MCPHS大学施設見学

昼 NESAの先生方による歓迎パーティー

午後 ボストン郊外 レンサムビレッジ・プレミアム・アウトレットにてショッピング

夜 貸切レストランでバイキングディナー

9月10日 (火)

13:40 Boston Logan International Airport 発

.....<日付変更線通過>.....

9月11日 (水)

16:30 成田国際空港 着・解散

【ボストン研修2019 参加者】 (学年は研修当時)

東京有明医療大学 (30名)

- 保健医療学部 鍼灸学科
飯島 秀也 (3年)・井手 美智 (3年)・今西 好海 (3年)・浦田 紗希 (3年)・江川虎之介 (3年)・金子 朝陽 (3年)・菊地 美旬 (3年)・岸 聖良 (3年)・相模 菜絵 (3年)・坂本 雅紀 (3年)・高橋 愛莉 (3年)・津田 月穂 (3年)・長田 梨那 (3年)・那須 健志 (3年)・晴山 健嗣 (3年)・山内 諒芽 (3年)・山田 彩愛 (3年)・依田 時生 (3年)・梶原 優花 (2年)・加藤 樹 (2年)・高瀬 智也 (2年)・二ツ森 光 (2年)・測上 栞 (2年)・柳谷 優花 (2年)
- 大学院 保健医療学研究科
御子神 光 (博士前期課程1年)・納部 瑠夏 (博士前期課程2年)・立川 諒 (博士後期課程2年)
- 保健医療学部 研究生
奈須 守洋
- 附属鍼灸センター 研修生
内田 裕
- 卒業生
鈴木 麻美

日本鍼灸理療専門学校 (9名)

真崎 恵 (昼本科3年)・増田 智美 (昼本科3年)・松林 和 (昼本科2年)・竹津 健亮 (夜本科2年)・難波啓太郎 (夜本科2年)・油 一世 (昼専科2年)・泉 順子 (昼専科2年)・千葉 由実子 (昼専科2年)・早川 路子 (昼専科2年)

鍼灸学科 引率教員

高倉 伸有 (教授)・矢瀧 裕義 (准教授)・高山 美歩 (講師)・高梨 知揚 (講師)



写真1 成田空港にて櫻井理事長先生と



写真2 ボストン・ローガン国際空港に到着



写真4 グリーンラインに乗って



写真5 MCPHS大学(ロングウッドエリア)



写真3 宿泊ホテルからの夜景



写真7 Harvard Medical School



写真8 Ted Kaptchuk先生の講義

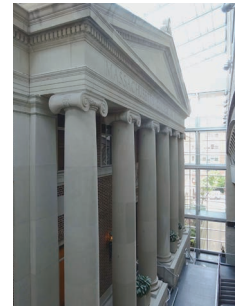


写真6 MCPHS大学
校舎内の旧校舎



写真10
アメリカン・ディナー



写真9 Harvard Medical SchoolにてKaptchuk先生と



写真11 Jian Kong先生



写真12 Martinos CenterにてKong先生と



写真13 Navy Yard



写真14 エーテルドームにて



写真15 ステーキディナー



写真16 MIT博物館にて



写真17 フェンウェイパークにてメジャーリーグ観戦



写真18 クインシー・マーケットにて



写真19 ボストン美術館



写真22 Iuliano先生の講義実習



写真20, 21 NESAsにてIuliano先生・LaCoss先生らと



写真23 NESAsでランチ



写真25, 26 ボストンでの最後のディナー



写真24 NESAsのHul副学長・Gorman先生らと



写真27 帰国(成田国際空港にて)